

翻訳〔抜粋〕

ダイアン・ロング・ホーヴェラー著

『ゴシック・フェミニズム—ジェンダーの職業化、
シャーロット・スミスからブロンテ姉妹まで』

第5章 I 「文明化の過程の勝利—ブロンテ姉妹とロマンティック・
フェミニズム」

(Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 1998, pp.185-190.)

ダイアン・ロング・ホーヴェラー

訳：上 岡 サト子*

**Dian Long Hoeveler, Section 1 Chapter 5, of
“the Triumph of the Civilizing Process; The Brontës
and Romantic Feminism” in *Gothic Feminism: The
Professionalization of Gender from Charlotte Smith to
the Brontës* (Pennsylvania: Pennsylvania State UP,
1998, pp.185-190.)**

Dian Long Hoeveler

Translated by Satoko Ueoka*

Abstract

This is the partition of the translated version into Japanese of *Gothic Feminism*. The author, Diane Long Hoeveler analyzes the representative female gothic novelists of the English literary world of the late eighteenth and early nineteenth century, focusing on Charlotte Smith, Ann Radcliffe, Jane Austen, Charlotte Dacre Byrne, Mary Shelley and the Brontës. Hoeveler's study revealed that what the female gothic genre tried to construct, consciously or unconsciously, was a discourse system to help white bourgeois women, the newly emerged but feeble class in a changing society: “professional femininity”—a cultivated pose, a masquerade of docility, wise passivity, and tightly controlled emotion. She defines this as the professionalization of gender.

*うえおか さとこ：大阪国際大学法政経学部非常勤講師〈2004.6.28受理〉

In the female gothic novels, “heroines” are mostly depicted as victims of patriarchy in motherless and male dominant situations. Hoeveler says that the “victim feminism” criticized by the third generation feminist, Naomi Wolf can be traced to these heroines’ subversive struggles.

However, Hoeveler discovered “gothic feminism”, which presents a new interpretation of the gothic heroines like Cathrine II in *Wuthering Heights*, Jane Eyre in *Jane Eyre* and Lucy Snowe in *Villette*

Key Words

Diane Long Hoeveler, gothic feminism, professionalization of gender, the Brontës, Romanticism, *Jane Eyre*, *Wuthering Heights*, *Villette*

第5章

文明化の過程の勝利

ブロンテ姉妹とロマンティック・フェミニズム

人が黙って耐えるのは、その耐える力が持続している間だけで、力が尽きたとき、他人の言動を慎重に考えることをせずものを言う。

—シャーロット・ブロンテ

I

1847年までに、女流ゴシックのジャンルは、流行に敏感なロンドンの文学界では事実上消滅していた。しかし幸いなことに、その風聞は外界との交流の乏しいヨークシャーの教師館にはまだ伝わっていなかった。ゴシックの痕跡を残す古典的な蘭にくるまれて若い三姉妹とその一風変わった兄弟は、子供時代に親しんでいたシャーロット・スミス (Charlotte Smith)、アン・ラドクリフ (Ann Radcliffe)、メアリー・シェリー (Mary Shelley)、(私が推測するに)シャーロット・デイカー (Charlotte Dacre) の作品を改めて読んでいた。亡くなった母や二人の姉たちが家族の傍近くを徘徊していたし、権威的な父と、薬物中毒の兄弟からは踏みつけにされ、シャーロット (Charlotte)、エミリー (Emily)、アン (Anne) ら、ブロンテ (Brontë) 姉妹の生活は、ゴシック・ファンタジーを地で行くものであった。ゴシックに登場する家父長的な人物は、愛され、疎まれるという両面的存在であったように、姉妹たちは父を愛しそしてひどく嫌っていた。ブランウェル (Branwell) のような兄弟については——言うまでもないだろう。人生は、姉妹たちが思い描いていたようなゴシック的期待には決して応えてくれなかった。

幼少期を過ごした彼らの家ははよりの文学とは縁がなかったが、そこには、宗教に根ざす不安と知的な熱情が満ち溢れていた。子供時代のブロンテ家の子供たちは、好奇心に駆られて、とりとめのない [空想の] 世界に夢中になり、孤立した環境が輪をかけて圧倒的

に強くなっていた。彼らは子供離れた読み手であるにとどまらず、早熟で抑えきれない創作意欲を持った書き手となり、膨大な量の子供時代の習作（アングリア（the Angrian）とGondalのサガ）を残した。これらの性的妄想と姦通の物語には、ほとんど隠されることなく近親相姦、親殺し、母親殺しが次から次へと描かれており——はっきり言えば、小児神経症のような無気味さがちらつく。Bronte家の子供たちは、愛、裏切り、姦通、そして殺人を繰り返し語りながら、同時代および前の世代のゴシック小説の自らの読みとともに、自分たちの心の傷や喪失感を基に描いていた。シャーロット・デイカーのアンチ・ヒロインヴィクトリアは、Bronte家の子供時代の習作の世界では親しみを感じさせるものであったろう。^(注1)しかし、本章では、習作はさておき、後期ゴシック・フェミニズムの古典的作品——『嵐ヶ丘』(Wuthering Heights)、『ジェイン・エア』(Jane Eyre)、そして『ヴィレット』(Villette)——のみを考察する。それぞれの作品は、女流ゴシック小説の伝統を汲む習慣、態度、強迫観念、不安などの包括的な注釈として読むことができる。しかし、つまるところ、これらの小説は、さまざまなゴシック・フェミニストの方略——母性の拒絶、家父長的な地所の支配、暴君的な宗教的力の支配との闘い、窒息しそうなほどの閉所恐怖症的核家族の転覆、女性教育の賞賛——を吟味しつつも、ゴシック・フェミニズムの限界の告発となっており、どの小説も妥協的な調子で終わっている。Bronte的宇宙では女性が確実に生き残れる保障はない。成功する時もあればそうでない時もある。ジェイン・エアが最も激しく試みたように、女性たちは自分の運命を自ら決定しようとするかもしれないが、しかし結局のところ、彼女らの頑張りが事態を変える要因となったようには思われない。Bronteのヒロインたちは厳しい運命と、さらに言えば、敗者になるかもしれない過酷な世界のなかで生きていた。Bronteのヒロインたちの生死は、巡り合わせと彼女らの運命を支配しようとする個人の限られた努力に左右される。Bronte姉妹は女流ゴシックのヒロインに現実性をもたせ、そのようにして、ヒロインを近代の世界に招き入れている。

Bronte姉妹は合作的なグループであり、文筆家の連合体であるという点で、おそらくどの女性作家も太刀打ちできない。単なるどっちつかずの立場で、歴史を超越した設定の中で書いている個人ではない。^(注2)Bronte姉妹の小説は、ゴシック小説の構造と意味を形成しているはずの家族の力学に付随する反復性の強迫観念を表象している。前述したように、女流ゴシックが家族構造に寄せるある確信は、フロイトが後に、「無気味なるもの」と名づけるものと、偶然とは済まされないほど類似している。女流ゴシック作家にとって、家族は文字どおり恐ろしいものである。というのは、家族は、我々一人一人がもっと若くより理想化されたもう一人の自己によって取替え可能であるということをもっと見せつけるからである。フロイトが後に指摘したように、無気味なるものとは、単なる繰り返しのことではなく、被抑圧者の回帰のことでもある。そして、家族という単位のなかで、非常にひんぱんに立ち返ってくるように見える被抑圧者は、ばらばらになった不完全な自己の亡霊なのである。フロイトがここで述べようとしたのは、家族の中の一個人は、単なる一個人では決してなく、彼/彼女は交代を繰り返し、最後は次の世代にそっくり取って代わられる役割であるということだった。愛、それも、分割された魂のもう一方と再

会すると信じ込ませているプラトニックな愛に最高の価値を置くことは、ブロンテのヒロインたちを駆り立て、最後には滅ぼしてしまう夢となった。^(註3)

文学上、この現象の最も際立った例の一つは、『嵐が丘』で登場するキャサリン1世である。彼女は、娘として登場し、妻、母となるが、間もなく、その娘のキャサリンによって、娘、妻、そしておそらく母としても取って代わられる。そして、次は、この娘が、同様にとって代わられることになるだろう。このパターンは、すべての家族の成員はその全体の中の小さな部分であり、そしてその全体はどんな一部分の価値よりも常に偉大なものであるという事実を再現しているのである。読者もまた、ブロンテ姉妹同様、家族というものは、複数の自己の集合であり、個々のアイデンティティは相互間の変化する関係に依存しているということに気付く。お互いに力を行行使し悪用するのは、家族が本来もっている性質であるが、同時に、世代の生き残りの問題のために闘うのも家族の本質である。さらに、痛みのある場であり、苦しみの場であることもまた、家族の本質である。キャサリン1世にとって、異性愛の情熱のある形態を理想化することは、家族として経験したジェンダーの闘いから逃げる手段となっている。キャサリンは、——「ヒースクリフはわたしです！」と、ヒースクリフを彼女の最も唯我的なイメージに仕上げる努力をする過程で破壊された。キャサリンがもっと早く知るべきだった事実は、傷付いたゴシックの悪漢は、感傷小説のヒーローの役を演じられないということである。エミリー・ブロンテは、あたかも、ゴシック小説の登場人物を、感傷小説のプロットに移植しようとして、その場合、なぜすべてが台なしになり、そして一人残らず不幸になったのか不思議に思っているかのようである。ブロンテ姉妹の小説の特徴として私が捉えている「ロマンティック・フェミニズム」は、ここまで見てきたように、他のゴシック・フェミニズムのヒロインたちの中では機能してきた身体から、ブロンテのヒロインたちが、逃れようとして、挫折していることから生じている。ブロンテのヒロインたちは、女性化された側の自己の愛を通して、ジェンダーの闘争から逃れることが可能であると信じている。しかし以下に見るように、彼女らの努力は、ひいき目に見ても、どっちつかずである。

18世紀の終わりから19世紀初頭のブルジョア作家が言うとおりに、危険なほど価値観が変化する世の中で、家族が、唯一の確かで疑いのない現実であったならば、ゴシックが、特に女性による作品の中で展開されてきたように、家族を疑問視し、少なくとも再定義しようとした理由を考えてみることは可能である。正統性と男性の優位性に基礎を置く相続権を保証するために確立され強化されている家父長的な特徴を持つ家族は、社会の中で聖化されたトーテム、法を越える秩序として機能しており、法的制度の基盤を成している。^(註4) 女性によるゴシック小説が、露骨な形ではないけれども、意識して行おうとしていたことは、家父長的な制度としての家族がもっている特権や当然のこととされているさまざまな優位特権を壊乱することである。そういう意図のもとに、近親相姦、母殺し、父殺し、激しい同胞の対立、抗争、先祖の中にある象徴的な食人的傾向、そして、追われ、迫害される子供たちの逃避の夢が多く描かれている。ゴシックの家族は、その成員が、個としての正当性の証を求めると同時に私的な探求と、種の生存に向けた神話的な闘いの両方を演じている劇場である。作者、語り手、主人公としての女性は、一つの家族の運命を辿りながら、彼女が全

面的に人間の歴史を作り変えるか、完全に破壊する文学的ファンタジーの形成に参加している。『嵐が丘』を激しく突き動かしている夢は、家族が最後に自己崩壊し、女性は何よりもまず個人として生き、役目を果たすことが認められるというファンタジーである。

しかしながら、この家族不在の世界は決して達成されず、すべてのブロンテの小説は、家父長制とその稜堡の持つ権力、首位性、究極的な不滅性に頭を垂れて屈服して終わる。ゴシック・フェミニストとしての女性たちは、家族はないものとして書き直そうとしているが、彼女らの努力はどう見ても限界があり、悪くすると、まったく不毛で自滅的であると結論せざるをえない。ルーシー・スノウは、自分の学校によって新しい世界を創造しようとし、ジェイン・エアは、弱く傷ついた夫と、手のかかる息子を伴って孤立した森へと引きこもることによって、完全に均衡の取れた生活を見つけようとしている。キャサリン・アーンショウは、子供を家族ではないものの中へ生み落とそうとして死んで行く。キャサリン2世が、暖炉の前に座って、ヘアトンに読み方を教えようとしているのは、新しいアダムを作り上げようと試みる新しいイヴと我々が対峙しているのだということが分かる。すなわち、女性は悪であり、この世のすべての苦痛の種であることをまだ教わっていない新しいアダムだ。ゴシック・フェミニズムが読者に教えていることは、女性は教育という漸進的な改革を通じてのみ、両性にとって効果的な変革を遂げることができることである。世界を新しく書き直すことによって、女性作家たちは、両性のための新しい展望を構築しようとしている。両性にとって、その住みかは、かつては、人々は墮落し傷物になった存在であると教えている息苦しいところであったが、もはやそこに捕らえられることはなく、新しいゴシック・フェミニストたちは、異なったメッセージを提示しようとしている。すなわち、教育と知覚が、世界の見方と可能性を左右するということである。ルーシー・スノウ、ジェイン・エア、キャサリン2世は、とりたてて優秀な教師ではなかったかもしれないが、すべて教える人であり、その事実こそが、19世紀半ばの女流ゴシックのヴィジョンにとって重要なのである。

結局、ブロンテ姉妹の小説に頻出する寓意的要素は、彼女たちが実践し続けた、バルト(Barthes)の「双方否定」(neither-norism)、ないし、ハーツ(Hertz)の「二面性の置換」(double surrogation)に当るものの中に、ひとつの説明を見出すことができる。^(注5)『嵐が丘』の二人のヒーローは、最後には破壊されてしまうのであるが、「善」と「悪」、貴族と下層階級の双方を消し去る強迫衝動を示している。一方では、『ジェイン・エア』におけるバーサ・メイソン/ヘレン・バーンズの二分法も、これと似ていなくもない。本当は、ブロンテ姉妹は、彼女らの成熟した作品の中に、子供時代の習作の中で実践していた広範囲にわたるメロドラマ的なロマンティック・フェミニズムを復活させようと試みたのだが、彼女らは成熟し、大人の感覚を身に付けたために、その企ては思いどおりには実現せず、同じシナリオ、もっと明確に言うと、同じトラウマ、同じ心の傷を繰り返すことを余儀なくされたのである。

ブロンテ姉妹は、新しく勃興してくるブルジョア階級の女性、すなわち子供の身の回りの世話だけではなく、教育の責任を負っていた女家庭教師、妻、母親たちのためにゴシック・フェミニズムを書き直した。ラドクリフ、オースティンのいずれよりも、当然現実的

にならざるをえなかったために、ブロンテ姉妹は、ウルストンクラフトやその追隨者の見解が広がりを見せ、有名となり、読者層に受け入れられてきた時に初めて、女性のための社会的、政治的、経済的変革が起るだろうと認識していた。ブロンテの小説では、教育の場面、読書の風景、そして、人物と運命を形成するにあたって、ロゴス、すなわち言葉の力で訴えているところが随所に見られる。男女が平等である新しい世界をイメージする壊乱的活動の中で、女性が犠牲者でなく、犠牲者ぶることもしないで、彼女の保護するものを導いて行く学校教師が、ゴシック・フェミニストの最後に現れた姿である。ブロンテ姉妹は、女らしさというジェンダーを職業化するのである。そのテキストは、女家庭教師や学校教師のため、ブルジョアの世界を安全なものにしながら、性的に大らかな貴族の女性たちの魅力をきっぱりと消し去っている。エリアス (Elias) が説明している「文明化の過程」は、パーサ・メイソン・ロチェスターが、貴族の地所の屋根から飛び降りるとき、そのピークに達しており、それによって、新たに職業をもった少女のような女性が改革された貴族制を占有する余地を作りだしている。この究極的な打擲ファンタジーによって、中産階級のヒロインたちは、現在、「女性らしさ」の適切なモデルとして我々が認めているものを職業化し、コード化している。ジェインの勝利の中に、我々は処世術としての(職業的な)女らしさを身につけたゴシック・フェミニストの典型を見ることができる。彼女が最も尊ぶのは、家庭的で、地味で、小柄で、要求の少ない性質である。一方、テキストにおいて、明らかにリビドー的である貴族の女性たちは、みな罰せられているだけではなく、存在を抹消される。このファンタジーは影響力のあるものであり、我々の世紀に入っても生き延びてきたのである。『レベッカ』(Rebecca) がよい証左である。

原注

1. シャーロットの子供時代の習作の現代校訂版としては、Christine Alexander, *An Edition of the Early Writings of Charlotte Brontë* (Oxford: Blackwell, 1983) が刊行中である。これまで3巻が出版され、4巻目が刊行予定。*The Glass Town Saga, 1826-32* (Oxford: Blackwell, 1987); *The Rise of Angria, 1833-34* (Oxford: Blackwell, 1991); *The Rise of Angria, 1834-35* (Oxford: Blackwell, 1991). エミリー・ブロンテの子供時代の習作は、Fannie Ratchford編纂、*Gondal's Queen: A Novel in Verse* (Austin: University of Texas Press, 1955) が出版されている。
2. ブロンテ姉妹を、いちばん長く生きた丈夫なシャーロットが介在した家族的な文筆家の連合体と見る近年の議論については、Helena Michie, "That Stormy Sisterhood: Portrait of the Brontës," in *Sororophobia* (New York: Oxford, 1992) を参照。家族を一つの文筆家の連合体と論じる最近の傾向は、以下の幾つかの伝記に反映されている。Rebecca Fraser, *The Brontës: Charlotte Brontë and Her Family* (New York: Crown, 1988); Tom Winniffrith, *The Brontës* (London: Macmillan, 1977); *The Brontës and Their Background: Romance and Reality* (New York: Barnes, 1973); Juliet Barker, *The Brontës* (New York: St. Martin's, 1995)。
3. フロイトの不気味なるもの (the uncanny) の理論は、ホフマンの短編、「The Sandman」を読んだことがもとになっている。フロイトの小論、「The Uncanny」(1919) in *SE* 17:219-56 に加え、視覚的なものの優位性と「男根的なまなざし」におけるその複雑さに関する刺激的な分析である、Peter Brooks, *"The Body in the Field of Vision" in Body Work* (Cambridge: Harvard University Press, 1993), 88-122 を参照。
4. 当時の歴史空間にブロンテ姉妹の小説を位置付ける批評は、従来から広く行われてきた。例えば、

Margaret Lenta, "Capitalism or Patriarchy and Immortal Love: A Study of *Wuthering Heights*," *Theoria* 62(1984), 63-76を参照。ブロンテ姉妹を、特有の家族構造の中にいる著者として概観したものに、Maurianne Adams, "Family Disintegration and Creative Reintegration: The Case of Charlotte Brontë and *Jane Eyre*" in *The Victorian Family: Structure and Stresses*, ed. Anthony Wohl (London: Croon Helm, 1978), 148-79; Jerome Bump, "*Jane Eyre* and Family Systems Therapy," in *Approaches to Teaching 'Jane Eyre,'* ed. Diane Long Hoeveler and Beth Lau (New York: MLA, 1993), 130-38がある。

5. Barthes, "Neither-Norism," in *Mythologies*, trans. Annette Lavers (New York: Hill, 1972), 81-83; Neil Hertz, *The End of the Line* (New York: Columbia, 1986), 224.

訳者覚書

本翻訳は、「女流ゴシック小説研究グループ」(仮称)の研究企画の一環として2002年3月にスタートした。序論、シャーロット・スミス、ジェイン・オースティン、シャーロット・ディカー、メアリー・シェリーに関する各章の翻訳は千葉麗(奈良教育大学非常勤講師)が担当、序論、アン・ラドクリフの章は村尾純子(関西大学非常勤講師)、序文、アン・ラドクリフ後半、ブロンテ姉妹の各章は筆者が担当している。